

安部山公園創設者 安部熊之輔

祖父は海で人を守り 孫は陸で人、果樹を育て



果樹園芸などの農事、公園開設をはじめ社会各方面で活躍した安部熊之輔

2016年(平成28)12月発行の「さくら」北九州歴史文化遺産で、白洲灯台により浅瀬に苦しむ船、人命を守ろうとした岩松助左衛門を取り上げた。人を、

の地を果樹園かつ桜苗を育てる地として彼が開墾したもので、のち、その名から「安部山公園」の名称で親しまれ、かつ歴史を感じさせる。

さらに公園開発へ

社会を守り、発展を期したその生涯、生き方は多くの人を魅了している。そのことは、彼の子孫にも大きな影響を及ぼしていた。今回紹介する安部熊之輔もその一人。彼もまた、今日の社会に大きな足跡を残している。

北九州市小倉南区の湯川一帯、足立山の南山麓に位置する安部山公園。春3月、約1万7400平方メートルの緑地は約400本の桜に覆われ、市民はもちろん市外からも多くの人が訪れ、心を、体をなごませる。園内山側には和気清麻呂像や安部熊之輔翁頌徳碑なども立つ。清麻呂像は安部が生前の1923年(大正12)に建立していたもの。その後地震や風化で倒れ、1993年(平成5)に再建された。公園は1905年(明治38)、原野だったこ

彼は岩松助左衛門の長男・長之助の長子として企救郡長浜浦(北九州市小倉北区長浜)で1861年(文久元年)出生。父長之助は33歳の若さで没したが祖父助左衛門は当時まだ健在で、灯台建設を目指して小倉藩などへの働きかけ、資金集めなどに奔走していた。助左衛門没後、灯台建設は父の弟栄吉が継ぎ、熊之輔は1877年(明治10)、製缶工を志して上京、横浜で働いていた時、1881年山梨県でブドウ栽培を見て一転、果樹園芸を志した。21歳だった。

1885年(明治18)に帰郷し、遠賀郡戸畑町中原(現・北九州市戸畑区)

で果樹園開発を試みた。その一環で全国のみカン栽培地を調査、研究して回り、その成果を「日本の蜜柑」と題する本として出版するなど、異様ともいえる程の入れ込みの果樹園芸生活。その後、アメリカにも渡って研究を深めた。それらの結果から、1905年(明治38)、中原の地は果樹園には不向きと判断して土地を安川敬一郎に売却し、母の郷里・湯川に原野を購入、柑橘、ビワ、梨などの果

樹園造りとともに桜苗の育成を始め、今日の安部山公園につながった。ちなみに、安川に売却した中原の地が今日の九州工業大学である。本来の姓・岩松が安部になったのは東京から帰郷後の1889年(明治29)、親族の西谷村(現小倉南区高野)庄屋、安部茂平の養子になったためである。

思いは祖父と同じ 人を助けること

湯川の一帯は明治末年には桜の園として有名になって公園化が進んだ。彼はまた、そのころ農協の前身・農会の組織作りにも尽くし、また園芸技術者の育成などに努めている。これらの実績から1915年(大正4)には衆議院議員に当選。

1918年には小倉電気軌道株式会社

を創設した。小倉中心部と北方間にそれまでの馬車鉄道から脱皮し、路面電車を走らせる会社。2年後運行を開始し、後、九州電気軌道、さらに西鉄によって運行され1980年(昭和55)の廃線まで60年間、市民の主要な足であり続けた。気付く人はいないだろうが、市民に身近な存在でもあったのである。1925年(大正14)8月、65歳で死去。公園にある彼の業績を称える頌徳碑で、時の東京農業大学校長横井時敬氏は彼を激賞して「君が功績を永遠に伝えんことを図る」と記している。

「当時、漁民も農家も皆、貧しかった。その中で助左衛門は漁民を助けようと図り、そんな祖父を見て育った熊之輔は貧しい人たちを何とか助けたい、との思いで生涯を捧げたのではないだろうか。今、安部山公園に熊之輔翁顕彰碑はあるものの、知る人は少ない。見る人もいない。彼の顕彰会は出来ないだろうか」と訴えている。

シニアスタッフ 村田和夫

今回の歴史文化塾は感染予防のため中止致します。



桜満開の安部山公園に立つ 安部熊之輔翁頌徳碑